

# 私の二十五年の歩み

——ささやかな国語教育個体史の素描——

池田 恭仁子

## 一、はじめに

広島市立国泰寺中学校にはじめて赴任したのは、一九五四年五月、私が二十二歳のことであった。これが、私の国語教師としての第一歩であった。以来、私が歩んだ二十五年は、縁に結ばれた多くの人の支えによって私自身の歴史を刻むことができた。今、それをみつめなおすことは、なんとおもはゆいことであろうか。しかし、自己に厳しく生き、自分を少しでも豊かにするためには、あえてそれをしなければならぬと思う。そしてまた、野地先生ご遺暦の年に当たり、このような拙稿をまとめることが、果たしてお祝いの気持ちを表わすことになるのだろうか、先生のお教えにじゅうぶんおこたえすることもできず苦い反省の思いをかみしめている者の姿をお見せすることにもなるだろうと思う。

人の一生を考察するのに、ライフサイクルなどと言われているようである。五・六年あるいは十年を一区切りにし、家庭生活や仕事、自己の人間形成などのあり方を、生涯を通して計画的に考えようとする論理である。とはいえ、複雑な人間関係のからみ合いの中で生きている以上、そう計算通りにはいかなないものであるけれど、私もその考え方を利用して、過去の営みをふり返ってみようと思う。私

の場合は、次のように分けてみたい。

第一期（一九五四年〈昭29〉五月～一九六〇年〈昭35〉三月）文章教育の方法を模索した時期

国泰寺中学校（二年間）と国泰寺高校非常勤講師（四年間）の六年

第二期（一九六〇年四月～一九六六年〈昭41〉八月）幼児語と創作童話にとりくんだ時期

退職後、家庭で育児に専念した六年半

第三期（一九六六年九月～一九七三年〈昭48〉三月）「現代国語」と「古典」の読解指導に力を注いだ時期

広島市商業高等学校勤務、転勤一年前までの六年半

第四期（一九七三年四月～一九七九年〈昭54〉三月）総合的な国語の力を育てることに焦点を定めた時期

転勤一年前と広島県立海田高校勤務（三年間）および広島観音高校勤務（二年間・現在より一年前）の六年

第五期（一九七九年四月以降）

このように見ると、現在、第五期にさしかかっていることになり、すべての問い直しの時期にあると思う。外的条件によって区切られ

私の営みが、実質的にどのような経緯をたどったか、また内的に向上したかどうかということを反省し、今後のあり方を考えていきたいと思っている。以下、第一期から第四期までの、ささやかな素描を試みてみよう。

## 二、文章教育の方法を模索した時期（第一期）

他の新任者とともに、新年度少し遅れて発令され五月に国泰寺中学に着任、さっそく六十六名（男子四十二名、女子二十四名、地区別クラス分け）の二年五組の担任となる。授業時間は、たぶん二十二～二十四時間だったと思う。生徒の急増期で校舎・教室が足りず、午前と午後の二部授業の非常事態であった。すべてが新しい経験にいとむわけで、少しおおげさに言えば、冒険時代・修業時代ともいえるであろう。ともかく、何でもやってみようという意気込みであった。クラブの指導では放送部を担当し、放送劇「星は見ている」〔同題名の、原爆でなくなった一中生徒の父兄の手記集を脚色・演出）をつくったことも思い出の一つである。今から思えば、未熟なために何をやってもざるの目から水がもれるような状態であったが……。

次にいくつかの項目をあげて整理してみることにする。時代の動きとしては、昭和三十年（一九五五年）に文部省が小中学校の指導要領を改訂することを発表、同年第一回母親大会が開かれ、広島で日教組主催の母親と女教師の会が開かれたと記憶している。

### (1) 文章教育（読解指導と文法教育）

。昭和29年……：大学で卒業論文を書いた時、文法教育を生きた文章教育としてとらえ、その構想をえがいたのであったが、それ

を実践にうつそうとした場合、実際にはその成果がどうであるかということも、実践の理論としてどう組み立てられるのかということもわからず、あせるばかりであった。実践の主なこととしては、中学二年生を対象とした「読書ノート」の指導。その感想文の文例を用いての接続助詞を中心にした文章指導。グループ別での脚本創作指導。クラス文集作成。グループ学習指導など。

。昭和30年……：中学一年に「要旨をとらえ要約文を書く」指導を行なった。教材としては、「獵人日記」（教科書は別の表題、ツルゲーネフの訳文の一部）が印象に残っている。「トロッコ」（芥川龍之介）の学習では、語句調べのカードをもとにして生徒が自分たちで辞書の形に作る方法を考え、語彙力がつくような指導を試みた。もし引き続き中学校に勤務していたならば二～三年間の実践ができたであろうが、一回だけに終わってしまった。また、中学一年の生徒の調査をし、「中学生の文章読解力」をテーマに研究物を作成、市教委に提出して賞をいただいた。この年、ブロック別（中四国九州）の国語教育研究会が行なわれたが、記録者として参加し、発表はしなかったが、レポート参加をした。「中学生の文章読解力」の調査において用いた文章は、志賀直哉著の「朝顔」であった。

。昭和31年以降は、国泰寺高校で読解指導と並行した作文指導を行なったが、体系づけるまでに至っていない。

### (2) 叙情性

。エピソード……：昭和29年に受け持ったクラスの女生徒、珠玖

さん(中二)が、数年たつて書き送ってくれた手紙の中に次のような内容があった。『国語の時間にクラスでつくった短歌のプリントの中に先生の歌があったけれど、その一首が今でも忘れられない。私は今ごろになってこの歌の意味がよくわかって好きた。』という意味であった。その短歌も手紙に書いてあったけれど、現在失ってしまつて私はその歌の下の句しか思い出せない。歌の意味は、教室にたんばほのわたげが飛んできたが、どこからやつてきたのか春の女神にたずねたく思うというのである。思つてみてもはずかしくてたまらないのだが、私の歌を覚えてくれた生徒のみずみずしい叙情を、この時ほどありがたく思ったことはない。同時に、この年齢ではやや理解しにくいと思われるものでも、ことばの意味よりも先にリズムやイメージで印象に残るような、教師自身のなまの抒情性ある作品に触れさせることも大切だと知つたのである。彼女は今は名古屋市に住む二児の母親であり、この時のクラスは今も十年目毎に私を囲むクラス会を持っている。このようなことから、爾来、短歌・俳句の創作指導においてプリントをした場合には必ず自身作品を一首あるいは一句でも入れるようにし、また、折にふれて作つた俳句や短歌を授業のはじめに紹介したりすることにしている。一人でも二人でも、心に残してくれる者がいることを信じて……。

。エピソード二……私の手許に、高校二年の三クラス合同の文集がある。表題は、「紫花」、国語を教えた生徒たちの詩や作文などが掲載されており、私も詩とあとがきを書いている。当時、

私としてはとても氣ばつた書き方をしたなと反省している。そのころの教科書は「総合国語」ではなかつたかと思う。文集の編集の中心となつた吉村君からは、卒業後もしばらく便りがあつたが、今は消息が絶えている。

。エピソード三……昭和35年高校卒の男子生徒が、卒業して十年くらい後の同窓会で会つた時、「高村光太郎の『道程』を習つた時先生が言われたことを覚えていますよ。」と言つてくれた。自分では忘れてしまつてゐることばも、受け取る者の心によつていつまでも残るといふことはごく当たり前のことであるが、その事実が再び自分のところへ帰つてきて確かめられたことの幸せを、その時感じたのであつた。

### (3) 古典教育

国泰寺高校の実践でまとめようと志したテーマは、単語教育・文教育・文章教育およびその発展的形態としての作品教育である。これは私の文法教育研究においてめざした実践の構想でもあつた。この実践の一部は、「国語教育研究」(光葉会)第四号(昭和37年発行)に発表したが、その中で次のように記している。表題は、「古典教材における文法指導と文学指導をどこまでどのようにしたか——高一「伊勢物語」(付「竹取物語」)の場合——」となつており、はじめに、『昭和31・32・33・34年と、四か年間続けて高等学校一年生を指導する機会に恵まれたので、その間の実践の進展および反省を綴り、三十四年度までの記録の一部を報告したいと思う。』と述べている。教科書は、昭和31年に新しく採用した「国語一(日本書院)」であつた。

古典教材は、第三單元「古代の夢——物語の誕生——」として、「竹取物語」「伊勢物語」が入門の位置にあり、「物語の誕生」(説明文「古典のことば」(文法單元)が付けられている。

文法指導では、用言は基本的なことだけにして、助動詞の指導に重点を置いて文章に即して行ない、その単元の最後に助動詞のまとめをするようにした。また、プリントをくふうして和歌によって助動詞・助詞の例を示すように作成した。ここから出発しなければ古文における「文指導」はじゅうぶんできないという、私の文章観にもとづくものであったが、それが正しかったかどうかははっきりしない。ただ、昭和50年に内地留学で広島大学に来ていたY氏が、31年当時、国泰寺高校の生徒で私の「竹取物語」「伊勢物語」の授業が印象深かったらしく、私と会った時話してくれたのであった。彼は高校時代には自分が国語教師になろうとは夢にも思っていなかったようである。不思議な因縁だと思った。

さて、文学指導のメモとしては、「素材よみ」「文法よみ」「享受よみ」という形でまとめ、「伊勢物語」「竹取物語」の感想を指導のまとめとして生徒に書かせている。特に33年・34年ごろには自然なふんいきで学習活動の高まりのある中で行なうことができたようである。また、「枕草子」と高校生の文章表現」についてまとめたいと思っていたが、記録をとっておいたまま未整理となっていて、この「枕草子」の指導の時、「春は曙」の書き方にならって、「私の四季」と題して、生徒自身の感覚でとらえた四季の一日のうちのよさを書かせた試みは、

かなり成功したのではないかと思う。以後、「枕草子」を指導する時には、必ず書かせて現在に至っている。それを分析考察もしていないし、このことが学習意欲の向上とか古典の学力とかにどのような効果があったかなどということは調査していないが、生徒が自然観に関心を持ち、自分たちの感覚と古典の世界との隔りを縮めることはできたのではないかと思っている。最も新しい例は最後の第四期のところで収録しておく。

#### (4) 実生活の転機

この六年の間には、昭和32年結婚、5月広島市内から主人の勤務の都合により佐伯郡廿日市町へ転居、33年ごろから35年までのYMCAでの高校受験生・大学受験生の指導、詩誌(大原三八雄氏主宰)の同人となる、などいろいろな経験をし、出座三か月前に高校の非常勤講師を退職して、安芸郡府中町に移り住んだのである。やめる決心をするまでには悩みもしたが、家庭で時機を待つことにしたのである。

### 三、幼児語と創作童話にとりくんだ時期(第二期)

この時期は、学校教育から離れ家庭にあったが、国語教育の道にできるだけ沿った、自分のなすべきことを見いだそうとした。野地先生の原稿浄書のお手伝いをしたり、研究会に出席したり、大学のゼミナールに参加させていただいたり、ともかく自己の言語活動と子どもの生きたことばを対象とした研究の姿勢を忘れまいと思うばかりであった。

#### (1) 幼児語の研究

。昭和36年……35年6月30日に誕生した長男正文が、片言を話しはじめて以来、毎日一語を一枚のカードに記録をしつつける。

。昭和38年……37年6月20日に生まれた長女礼子のことばも記録。

。昭和39年……「国語教育研究第八号」に、「幼児の言語生活の実態——二歳児のばあい——」(37・10・1稿)を発表する。

家事・育児の時間のあいだを縫うように暇をみつけては、久保良英教授の著書や論文、その他の研究書を読み、カードを整理し、原稿をまとめたりしたのだが、杜撰さは免れ得なかった。

この稿を見ていただいた野地先生、故山根先生、加藤惣一先生(広島文理大第一回卒業の大先輩、国泰寺中学勤務当時の校長)、先輩の石田民生先生(海田高校教諭から安西高校へ)にご批評ご激励をいただいたのはありがたいことであった。石田氏のことばを借りれば、当時は、何のための研究であるか問題意識がはっきりしないままにまとめられたものであったし、私自身の言語観も確立せず、思いつきのような面が多かったが、それはやはり母親としての弱さであったと思う。ちなみに付記すると、後にご出版なされたので知ることができたのだが、野地先生が「幼児語の研究」のため、ご令息のことばの採録をなさっておられたとはつゆ知らないことであった。

この年八月、京都府北桑田郡美山町に岡本明先生(元文学部長)の歌碑が建てられた。岡本先生のご慈顔とお教えを思い起こし、ひそかにひとり先生のお歌を朗詠して涙したことであった。

。昭和41年……光葉会研究発表会(8月7日)にて、「幼児のは

なしことばの実態とその指導——満五歳児のばあいを中心に——」という題で発表を行なった。当時の資料によると内容は概略次のようなものである。

1、題目設定の理由——①幼児が、ある言語環境のもとでどのような言語生活の発達をとげるかをみとどけたい。②ことばの教師である母親として考えねばならぬ問題がある。③学校教育における国語の力と、幼児期の言語生活との関連を将来の問題として考えたい。

2、よみ・かくことへの意欲と、はなし・きくことの力

3、五歳児のはなしことばの特徴

4、よい話し手となるための基本的な問題——①「心のとおり

に答える」(幼稚園での指導)②幼児の体験の話を録音(家族がよく聞いてやり、話しやすい質問をしてやる)——意欲

的に話す③文の長さ、文の切り方の注意

5、よい聞き手となるための初歩的段階における問題——①自

分の録音を聞いて考える②自分の問いに「ぴったり合った

答え」を相手に要求する③判断力をよい方向にむけるよう

気をつける

6、きくことから話すことへ、話すことからきくことへ

資料としては、満3歳8か月の話しことばと満5歳11か月の話しことばとを比較分類したものを出している。前者の場合は150文中、一文節の文が最も多く55文、最も長いのが六文節の文で1文であるが、後者の場合は、最も長いのは46文節で1文ある。ただし、この場合は、自分の体験(ふな釣り)の話をテー

プレコーダーで取ったものであって、「……してね、」で次々と続く形であるが、幼児としては区切っているつもりとも考えられ、幼児の話しことは文単位のとらえ方は明確に決めにいく点がある。

また、「話しことばの特徴」の一つとして、四歳から五歳にかけて、幼児自身が自分でくり返し読んだり聞いたりしたお話の本の中の表現を、自分の話しことばの中にとり入れて使うのが目立ったことなどを挙げている。

この発表の時の、野地先生や同期の橋本暢夫氏からの厳しいご批評は胆に銘じている。

## (2) ささやかな創作活動

昭和38年ごろから、子どもが本を読むようになったらせび母の書いた話を読ませたいと思いたち、同期の大野允子氏（児童文学家）の紹介により広島児童文学研究会に入会し、童話を書きはじめた。その同人誌「子どもの家」に少しずつ書いては発表し、研究会にも参加した。その一編「三つの本の物語」（子どもの家10号）については、中国新聞で次のように評された。  
「本にはそれぞれの時代がある。多くのこどもが知らされないで終る出生の意味を、原爆で結ばれた自分たちの新しい生命なのだ」とわが子に打ち明ける母の言葉が印象的。」と。この創作童話のストーリーは、中学校を卒業した主人公のみち子が、母の夏子の本棚の片隅から見つけた三冊の本をきっかけに、母から、原爆でみち子と同じ年頃に父母を失ったがその父母の心と命は自分に引き継がれているのだという話を聞かされ、その当

時のごと、さらに、母が父と出会ったのはデパートに勤めている時、「原爆特集」のとり持つ縁であり、彼も父母は原爆死であるが父や母は自分の中に生きていると聞かされ、共に生きる決心をすることなどを書き込んだ青いノートを見せられるというものである。

その後、再就職した高校で一年生にこの作品を読んできかせたこともあった。生徒の反応は、わかりやすく、心動かされた面もあったようである。教壇に立つようになってからもしばらくは書いていたが、まもなく仕事に追われ書く時間もゆとりもなくなり、会をやめることになった。私の子どもはどうかというところ、やはり母の書いた童話ということで、自分たちが主人公のものもあるので、相当関心を示して読んでくれたことはうれし。

## 四、「現代国語」と「古典」の読解指導に力を注いだ時期（第三期）

二人の子どものうち、下の女の子が小学校に上るまでは自分が育て、また教職にもどりたいと願っていた私の気持を、主人やしゅうと・しゅうとめ、自分の両親みんなに理解されていたのは幸いであったが、復職の機会は少し早く訪れたのである。たまたま、四十一年九月、広島市教育委員会学事課から要請があり、急に退職された広島市商業高等学校の先生のとを勤めることとなった。長男の小学校入学、長女の幼稚園入園の半年前のことであったが、自分も三十四歳という年齢を考えると、復職の時期としては制限にかかる寸前のところという状況であった。私の両親が忙しい仕

事をしながらも、二人の子どもの世話をしてくれることもでき、家族全員の努力と理解のお蔭で、私の勤務も軌道にのることができた。主人の両親は遠い田舎に住んでいたが、時々泊りがけで来てもらえたとし、隣家の奥さんにもお世話をかけたこともあった。こうして市商高校での生活がはじまったのである。

(1) 「現代国語」の読解指導

現代国語・古典ともにであるが、どのように勉強してよいかわからぬものが多いというのが生徒たちの実態のようであった。市商高校の生徒は、卒業後ほとんど就職するため、学習意欲の面において、ややもすると低くなる傾向がある。しかし、それも指導のくふういかんによって興味と関心さえ湧けば、必ず国語の力がつくと考えそれを実践にうつした。

まず、基礎学力をつけ、文章全体を正しく読みとるようしなければならぬ。高一では、要約文の書き方について、自分なりに指導法をくふうし、いくぶん効果があがったのではないかと思う。これは、要旨をとらえ、重要語句や中心文を見だし、形式段落ごとに一・二文にまとめ、各形式段落の關係からいくつかの大段落にまとめ、要約文を続けていって、全体の要旨にまとめていくというやり方である。型どおりにいかないところもいくぶん出てくるが、基本的な方法として、読解から表現への一貫した基礎学力づくりには欠かせないものだと考える。新任当初、中学校で試みたことをさらに発展させたつもりである。教材は、一年では「科学者とあたま」(寺田寅彦)、「行動中心の読書」(梅棹忠夫)「私の読書法より」(明治書院版)が適していたと思う。

この時期には、その他「比喩表現の文章中における働き」を指導し、レポートを提出させたりして、「叙述」の面から作者の文学の世界に迫る「手がかりをつかませよう試みたが、いくぶん生徒も理解を深めたのではないかと思っている。それに適する教材としては、「放浪記」(林芙美子)、「羅生門」(芥川龍之介)が印象に残っている。

また、ここに挙げた四作品については、段落および節ごとに小見出しを考えさせ、構想から主題に迫る方法の指導を徹底させるようにした。これも、ある程度成果があったと思う。その上、こうしたよい教材であれば、著者の他の作品や、同じ作品の教科書に載せられていない部分などを読んできかせたり、プリントしたりして巾と厚みのある指導ができるのである。

さて、読解の発展段階としての「書く・話す」ことの指導では、一学年のレポート作成、手紙文、二学年の詩の鑑賞文、三学年の「私の意見」の原稿作成と発表など、各学期のうちどこかで実施するように計画したり、読書指導と表裏一体のものとして、夏休み中全校生徒に読書感想文を課題とし、その中の優秀作品を集めて四十一年十二月には「道標」第一号を図書館・国語科共同で発行、以後毎年発行している。

現代詩の指導も、一年ごとにくふうを重ねてみた。教科書以外から教師が選んだ詩をプリントする、好きな詩を各自選んで鑑賞する、教科書収録の詩人の他の詩を各自探し、グループで主なものを出させてプリントし鑑賞した文を相互批評する、詩の創作を夏休みの課題にし、二学期に相互批評を行なうなど。創作の場

合は、私も批評を書き添えるようにした。短歌や俳句も、各自でつくった作品をみんなで点を入れ、一席から十席まで発表し話し合うのも楽しい時間の一つだった。

## (2) 「古典」の読解指導

古典の教科書は、市商高校では「古典甲」であった。古文の導入では、「竹取物語」の冒頭部分がよくあったように思う。その他、「伊勢物語」「源氏物語」では、国泰寺高校でも試みたように、藤原与一先生の「素材読み」「文法読み」「表現読み」の方法をできるだけ生かそうとしたが、じゅうぶん目的を達することができなかったように思う。つまり、それぞれの読みが一貫性をもたず解釈に時間をかけすぎたりしたからだと思う。漢文も、図書室で一斉に漢和辞典を使用していろいろな故事成語を調べさせたり、プリントや録音教材テープを用意したりしたが、はっきりした指導法は確立できなかった。

近世俳句の指導では、定型のリズムを把握し、五・七・五の各句のもつイメージの世界を作者の心に沿いながら再構築していく方法を、板書にもくふうをして指導した。その過程において、昭和43年「国語教育研究 第十五号」に寄稿したが、教材解釈とところどころの「くたびれて宿かるころや」の句意についてである。

ところで、昭和四十七年三月一日のことである。卒業式のあと、古典を教えた卒業生の一人武本さん（女生徒）が、自分が帰ったあと読んでくださいといって手紙を渡してくれた。これは、私の国語教師の生活の中で最高の記念といえるものであった。

その中の一節である。

「私は、試験こそできたためしはありませんが、そんなことは関係なく（？）先生の授業を楽しみにしていました。そりゃある程度、いやより良い点をとることは願うまでもないことです。しかし、それで終るより、雪を見ればある句を思い出して空想に耽ける……その方が訳を丸暗記して満点をとるより尊いことだと思います。（中略）

最後にお願ひがあります。私のようにポーツとした人が在校生又は新入生にいるかもしれません、残雪を見れば鹿（注・鹿の子まだらに）の語から）を思い出して空想して、夢の世界に飛んでいる人が……。でも一生懸命だということを理解していただきたいのです。」

そのあと、いつまでも今のままの先生でいてほしいといった意味のことが書きそえてあった。これを読んだ私は、生徒とはこんなものなのですよ」とあざやかに示されて目のさめる思いがすると同時に、よく書いてくれたと、胸がいっぱいになったのである。

## (3) 自己研修

この間、出発から約二十年を経過したが、常に研鑽の心を忘れまいと、教職から離れている間も、広島国語国文学会・光葉会・大下学園国語教育研究会にはできるだけ出席するように心がけ、大村はま先生の講演もよく聞いた。

市商高校在職中、昭和四十二年秋には、津市で行なわれた全国国語教育研究協議会地方大会に出張することができ、私にとって

大きな収穫となったのはうれしいことであった。この時の高校部会での公開授業の教材は「赤い岩」（長谷川四郎）であったのが印象に残っている。この研究会参加の経験を、帰広してすぐ生徒に話したところ、「先生があんなにまで生き生きと話してくださったのはじめてで、その目の輝きは強い印象を受けた」と話してくれた生徒がいた。やはり、教師は生きた言葉を語らなければいけないと、つくづく感じたのであった。

## 五、総合的な国語の力を育てることに焦点を定めた時期（第四期）

私が転勤した時点で個体史を区切らなかつたのは、すでにその一年前から事情があつて県立校への転勤の意志を固めていたし、その年、校務分掌の特活指導部の一員として生徒会誌「群青」編集の指導に當つたのも、新しい時期に入ったことになると思う。そして昭和49年に転勤した海田高校においても、文芸部の参与となり、学校文芸誌「桜苑」の編集指導をしたのである。この二つのことは、私にとつていろいろな苦しさや悩みはあつたが、楽しい仕事であつた。その時、生徒は「作文」はきらいだと言いがらも、書きたいことを書くとうとする時には自然に意欲的になるものであり、少しばかり道をつけてやることによつてよいものを發揮するのだということを、今さらながら身にしみて知つたのである。なお、文芸部の参与という仕事は、52年4月に転勤した広島観音高等学校でも引き受けることとなり、三年間続いて文芸部員

の創作活動や文化祭発表、文芸部誌「海溝」の編集などの指導に當つている。

この時期の最初の年、昭和48年は折しも高等学校改訂指導要領実施の年であつた。市商高校一年生は三省堂版の「現代国語」を使用しはじめ、新鮮な教材を生徒がよることだという印象がある。

### (1) 構想力の指導

書きたいものを見つけ、書く場をどのように設定するかが、作文指導の出発点だと思つている。昭和47年から48年にかけて、大村はま先生のご労作を読み、ヒントを得ては高校生向きに計画し実践してみたが、定着するにいたらなかつた。また、その次の段階として、構想と叙述の力をつける指導というのは、これも実情としてむずかしかつた。時間も少なかつた。

私は、思い切つて、一つの教材の学習の終りや始めに何か必ずまとめたものを書くように指導し、徹底的に「三段落構成法」を用いてみた。特別に、六千字や七百五十文字の原稿用紙を謄写印刷して用意し、一枚の内容を必ず三段落の構成にするよう指示して書かせたのである。これは少しずつ効果があつたのではないかと思つている。

昭和49年度には、海田高等学校で一年・三年の「現代国語」教科書は一年生が学校図書版、三年生が筑摩書房版を受け持ったが、まず一学期には、一教材ごとに、一文感想文をノートに書いて提出させプリントにした。同じ感想を、学習の終つたあともう一度、三文で表現させてみた。これもプリントにして比較させたが、この方法はよかつたと思う。ただし、いつもできることでは

なく、はじめのころだけであった。また、一年では、教材「青春とは初めて秘密をもつ日」（亀井勝一郎「青春論」より）から発展させて「青春とは」という短文を三通り書かせたりした。どのクラスもプリントするのが時間的にむずかしい場合は、教材ごとにクラスを交替でプリントしたこともあった。

同じ年の三学期には、「私の意見」ということで、一年生は「幸福について」（自分の幸福論を書く）——教材「幸福の探求」務台理作、三年生は「 $\mu$ であること」と「 $\nu$ すること」について（自分の社会観を書く）——教材「 $\mu$ であること」と「 $\nu$ すること」（丸山真男）を書いた場合、三段落で書くように指示した。以後、年度によって違うが、同じような方法で指導し、そのことによつて、少しでも構想のしっかりした文章を書く力がつけばよいと思うのだが、まだまだこれから指導のくふうと改善をしていかなければならない。叙述面に関しては、添削指導の域を脱していない。

50年度・51年度には、二万字作文を試み、一年生に（教科書は筑摩書房版）「黒い雨」（井伏鱒二）の感想、「ジョンナサン・スイフトの笑い」（白井吉見）のある段落のまとめ、52年度には、観音高校一年生で「新しい人間」（串田孫一）「知恵の構造について」より——教科書は第一学習社版）のある部分的表現の内容の要約、53年度には同じく一年生で、「現代の人間関係」（加藤秀俊）の結論の章——四つの形式段落から成立——を要約、（教科書は尚学図書版）などの指導を行なっている。二万字作文の指導の場合、書く時間と書いた文章の指導の時間を授業中にある程度組み入れることができ、効果も上ると思うが、やはり、時間的な関係でど

うしても一年生の段階においてしかできない傾向にある。

53年、観音高校では、冬休みの課題として二年生に「対話と論争について」（中村雄二郎）尚学図書版）の要約文、53年・54年の三年生の夏休みには「科学と人生論」（湯川秀樹）第一学習社版）を読んで意見をまとめて提出させたが、概括的な指導しかできなかった。また、53年度は大学入試制度共通一次元年であり、三年生に小論文指導を関係生徒数名に対して行なった。

(2) 総合的な書く力をめざして

昭和48年度と49年度の一学年の最後には、レポート作成指導を試みてみた。それより以前、市商高校において昭和43年から47年までは、一年間の集大成としての「文集作成指導」を続けたが、それは実際の編集にあたっては、何人かの生徒の自主的な活動に負うことが大きかった。海田高校においても50年に三年生のクラス詩集を作成している。今も手許にあるものを聞いてみると、それぞれの生徒の胸に何かを残すことができただろうと思う。

レポート作成では、昭和29年新任の年から折にふれては単元の特色に従ってレポート指導をした経験にもつき、それを学年の最後に行なった。市商高校最後の年の48年度、一年生対象に「もう一ぺん人間に」（石牟礼道子「苦界浄土」より——三省堂版）から発展的に身近な公害のテーマを選んで決めさせ、海田高校最初の年の49年度には、やはり一年生で「緒方の塾風」（福沢諭吉「福翁自伝」より——学校図書版）からいくつかの研究テーマを指定してその中から選ぶようにし、図書館利用を中心に資料を集め、整理し、書き方のパターンを指導し、生徒各自のくふう

にもとづいて書かせた。最後には、必ず自分の意見・感想を書くように指導することによって、総合的な国語力を発揮することができると考えた。

50年度には、三年生も最後に「舞姫」(森鷗外)(筑摩書房版)の作品指導の発展的形態として、いくつかの内容や関連した研究テーマをあげ、一つを選んで書かせてみた。

これらの成果を正確に判断することはできないが、生徒は作業を進めるにつれて学習意欲を示し、本を探し、読み、書き、考え、自分の身につく学習をしたように見えたのである。

### (3) 古典の学習指導

この六年間は、古典指導に関してはややマンネリ化した傾向があり反省している。

大学卒業時から、現代文・古文を問わず、文章を理解する力となる文法教育・文章教育をめざして実践に取り組もうとしたのであるが、それを体系的なものとすることもできず、勉強不足を嘆くばかりである。

漢文も時間に制約され思うようにはかどらない実情である。もう少し余裕を持ちながら、ポイントを押さえ実のある指導ができればどんなによいだろうと思う。昭和31年に、国泰寺高校一年生の漢文入門期の漢字学習導入として、生徒自身の名前について漢和辞典でできるだけくわしく調べて提出させたことがあるが、一回限りであった。ただ、そのことを卒業した生徒が覚えていて、自分の名の文字の意味をくわしく知ることから漢字への興味が深まったと、四、五年前に語ってくれた。このように学習者の側か

ら指導者のところへ反応がかえってくることは幸せだと思ふ。

52年には、観音高校一年生に漢詩の指導の最後の時間に一つの試みを行なった。「秋風引」(劉禹錫)の口語定型詩による訳詩である。まず、七五調八句で指導者がつくった例を読んできかせ、七五調か五七調で訳詩をつくらせた。これも生徒は興味を示していたし、叙情性は失われていないと喜んだのだが、実施したのはこの年だけで、翌53年の一年生には、よかった二編をプリントして読ませ、自分でも作ってみるように言っただけである。次にそれを挙げておこう。

#### 秋風のうた

どこからとなく 吹く風は

秋のけはいを 伝え来る

寂しいひびきを たてながら

送られるは 雁達か

目ざめた時に 気がついた

朝日の中の 庭の木に

ふと吹き入った 秋風を

庭の草木と たわむれる

風のひびきの わびしさが

ひとり旅する 旅人の

故郷を離れた わびしさが

心の中を 吹きぬける

どこからとなく 吹く風の  
秋のけはいが 身にしみた (M・M)

秋風の詩<sup>た</sup>

梢を震わせ 風が吹く  
音もかすかに 何処より  
秋の薫りと 雁の群れ  
孤独を連れた 旅人は  
誰よりも先に ひっそりと  
背中であれを 受けとめて  
心のかばんに閉じこめる (Y・N)

さて、古文の学習指導について六年間をふりかえってみると、  
文法指導では、一年生で主に体言・用言、二年生で助詞・助動詞、  
三年生でその他の品詞の指導と総まとめをするという計画で指導、  
それ以外に、一・二年生で待遇表現法や修辭法についてポイント  
を押さえながら指導し、その仕上げを三年生とする、という考え  
で行なってきた。国語科担当教師間の縦(各学年)横(各クラス)  
の全体を見通した連携を保って実践する必要性を、みなが感じな  
がら、ともすればいろいろな他の校務分掌や他の仕事などの関係  
で実行がともないにくいのを残念に思う。また、共通一次試験の  
対応ともいえるが、作品を少しずつでも教科書掲載のものは全部  
学習させようと考えるし、三年生では演習の時間が増えてきた。  
せめて生徒の心の振幅が狭くならないように指導者のほうでくふ

うを忘れないようにしなければなるまい。

次に、第一期で触れた「枕草子」の学習から発展させた「私の四季」という生徒の作品(54年度二年生)をいくつか記してみよう。

例①春は朝がいい。朝日に反射して光る若葉を見ると気持ちが晴れる。

夏は昼がいい。キラキラ照りつける太陽の光が海面に反射したり、浜に近い海底を照らしたりするのを見ると生きている実感がわいてくる。

秋は夕方暗くなりかけたころがいい。冷たい風が耳もとを通りすぎるとひとりぼっちでいることがたいへんすばらしく思える。

冬は朝まだ暗いのがいい。すべてが濃い藍色で遠くで波音がきこえるのは静かだよ。

(能美島から通学している男子生徒。彼は、修学旅行の文集に「パロディ百人一首」を書いている。)

例②春は昼がいい。寒い冬が終わわり、草木も芽を出しはじめて大地が躍動し、活気があってよい。

夏は夕方がいい。暑かった一日もやがて終わりに近づき涼しい風が吹き、風鈴の音が響くのがいい。

秋は日暮れ時がいい。赤トンボが夕日を背にうけて飛びかっ

ていて幻影みたいでいい。  
冬は夜がいい。空が澄みきっていて、星がきれいに見えて神秘的。(女子生徒)

例③春は昼さがりが良い。あたたかくのどかで幼いころにもどったような気分になる。

夏は早朝がいい。ひんやりとした空気が漂っている中に身をおくと、すがすがしい。

秋は何と言っても夜がいい。庭でなっている虫の音が美しい。冬は午後のあたたかいころが良い。寒くはあるけれど春の予感を感じさせてくれる。(女学生徒)

例④春はま昼どき。やうやうぼかぼかなりゆく、花など咲きて気分々々なり。

夏はつとめて。朝顔咲きていと涼し。犬と散歩などするもをかし。

秋は真夜中。あたたかきものなど飲みて趣味に熱中する、いと楽し。

冬も夜。冬の星はいとあはれなり。何枚も着ぶくれて白き息をはきつつ、さえたる星などがめ、そのあといそぎこたつに飛びこみ鼻をかむ、これ風流の極みなり。(女学生徒)

こうしてみると、例文として挙げたのは個性的・現代的な生徒の総合的な感受性や表現を見ることができるよう思う。他のは多く、観念的・一般的であったり、本文にひきつられていている者やあまりに実生活に正直である者や、面白半分に書いている者など様々である。この分析・考察については、次の機会に譲りたい。つまり、第五期——国語教育法の問い直し時期——にかかっているものであるから。また、現代国語の指導に關しても、現代詩

の指導(鑑賞作成と相互批評)の資料の整理をして考察すべきものが残っているし、評論文・随想・小説についても同様である。

## 六、おわりに

このたびの実践のまとめについては、まことに杜撰な資料とおぼつかない自己流の考察にもとづく叙述に終ってしまったことを恥じている。しかし、恩師野地潤家先生の還暦記念特集号発刊の機会に、少しでも自分の足跡を反省することができ、新しい活力も見出せそうな気持になることができたのは、ありがたいことだと思ふ。野地先生はじめ諸先生方の恩恵に感謝の念を捧げるとともに、今後自らを厳しく見つめていきたいと思つてゐる。これからも陰に陽に周囲の多くの人々の教えを受けることになるであらう。

恩師の先生方のご発展とご健康、同窓の方々のご活躍を祈りつ。(一九八〇〇八昭55V・三・三二)

(広島県立広島観音高等学校教諭)